



令和に求められる資質・能力を育成する授業づくりへの羅針盤 ～授業で力をつける～

さっさと いざいざ あったかい
高知家の教育

発行

R6年12月

西部教育事務所



西部管内の
講座 HP

【単元名】「四角形と三角形の面積」（第5学年）「円の面積」（第6学年）【授業者】武政 愛 教諭（四万十市立八束小学校）

学びの系統を捉える

浦田研究主任から、複式の強みを意識した取組と合わせて、学習指導要領で示された内容を基に、図形の系統性と働かせたい見方・考え方を中心とした単元づくりの視点について全体共有を図りました。



5・6年生の領域を揃え、お互いの学習を照らし合わせながら、自ら「図形間の関係」を見いだすとともに、「構成要素」に着目させることで、働かせる見方・考え方が共通していることに気付かせることができました。既習を基に考えることで解決できるように気付くことや解決過程を、根拠をもって説明できる授業を目指しました。資質・能力の系統性を意識して、目指す子供の姿を明確にした単元と授業をつくる大切さを学びました。《授業者》武政 愛 教諭

“図形間の関係と構成要素”に着目して考え、自らの考えを表現することができる子供の育成

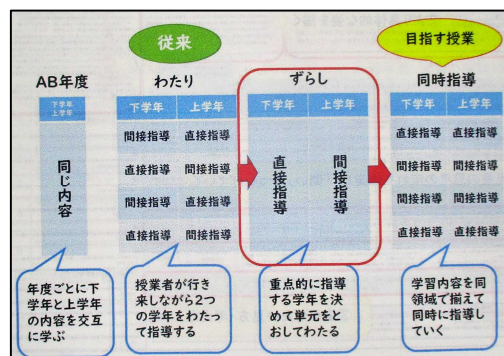
複式の指導方法の充実へ

目指す子供の姿に向け、強みを生かした複式ならではの単元を構想しました。そのうえで、**子供の实態に応じた複式の指導方法**についても、実践・検証・改善を重ねて取り組みを進めています。

同領域異単元での単元構想

子供の实態

“ずらし”を意識した授業実践



「子供の实態」を踏まえ、見方・考え方とつまづきを想定した単元、授業を2学年で具体的に描き実践する。

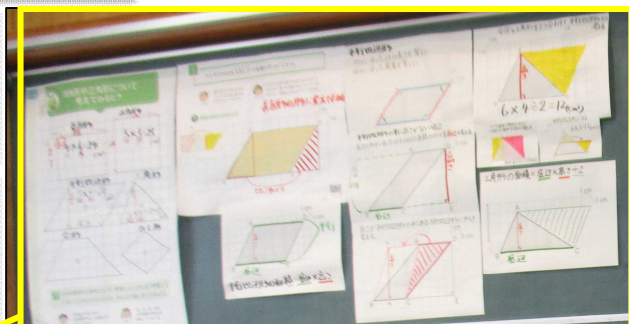
【注釈：ずらし】

学習過程を組む際に、同時に直接指導の時間とならないよう、意図的に交互にわたりを行えるようにすること。

【本時で育成する子供の姿：5年生】
三角形の高さが外にある場合と内にある場合も、同じ三角形として捉えて、面積の求め方について理解している。

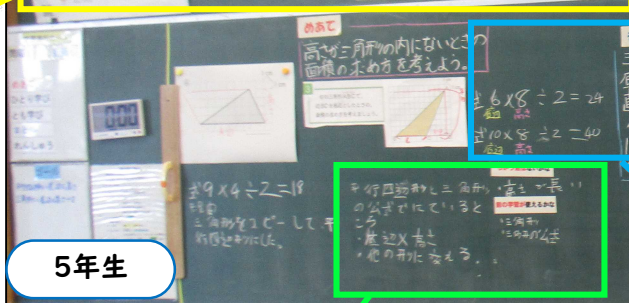
【本時で育成する子供の姿：6年生】
円の面積について、半径や直径に着目して考え、公式の意味について理解を深めている。

【学びの足跡から授業をつくる】
実態を踏まえ、子供の気付きを中心にした学びの足跡を掲示するなど、大切な数学的な見方・考え方を意識させます。また、前時と本時の共通点や相違点に気付かせることで、問いや見通しをもたせることにもつながることができます。



【教師の役割を意識した指導のポイント】

直接指導時には「**子供の見方・考え方を評価する**」、間接指導時には「**見通しを明確にもたせて、直接指導していない子供の姿を捉える**」ことを特に意識して複式授業を行いましょう。



5年生

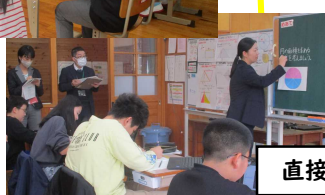


【学びの成果を実感させる】

本時で育成する子供の姿が達成できたかを評価する機会を設けます。子供自身で本時の表現活動を基に、解決過程を振り返り、学びの成果を実感させましょう。



間接



直接

【根拠を基に表現し、共有する】

既習を基にしながら表現したいことを表現しやすい方法で表し、その意図を友達と伝え合ったり、参考にしたりするなどの学びが展開できます。その際、全体共有も図ることで考え方などを捉えさせ、考察につなげましょう。



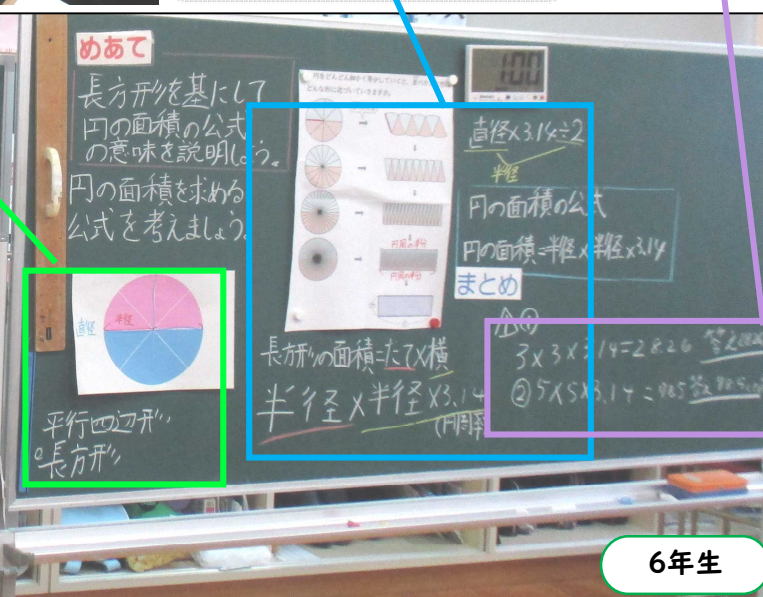
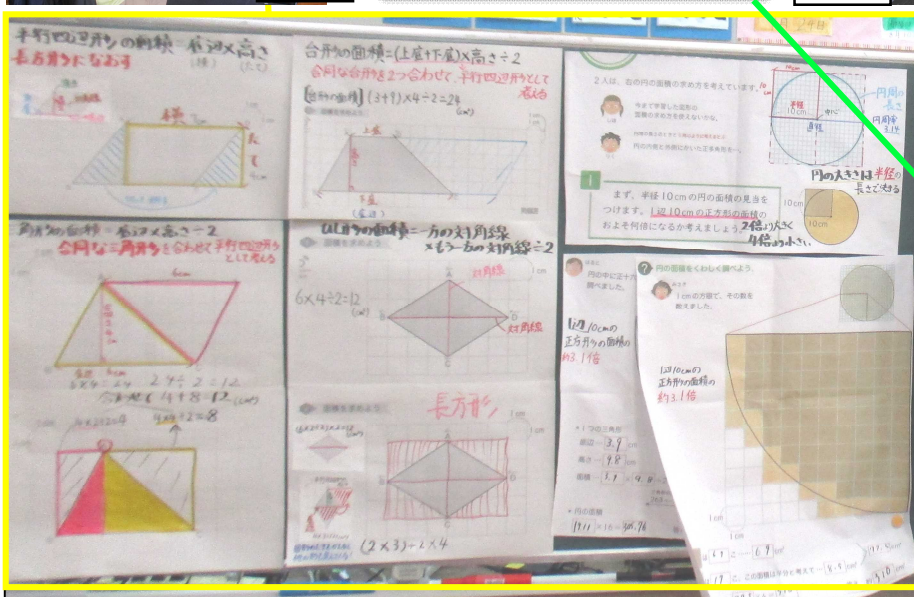
直接



間接

【見方・考え方を自覚させる】

式や図、言葉を関連させながら本時で働かせている見方・考え方を板書に可視化します。表現の価値を評価することで、本時だけでなく、いつでも使える見方・考え方についても、実感を持って捉えられるようにしましょう。



6年生

よりよい複式授業を目指して ～教員は職人～

複式授業においては必ず一人で学ぶ時間があります。その「ひとり学び」の時間を充実させましょう。そのためには、全ての子供に解決の糸口や視点をつかませるための「見通し」が大切です。解き方のルールを教えるのではなく、子供が能動的に動けるような見通しをもたせましょう。また、一人一人が自分で考えることができる時間も保障します。自分なりの根拠をもち、間違いを恐れず自分の考えを自らつくりあげる「思考の過程」を大切にしましょう。その際、自分の考えを言葉や図などの数学的表現を根拠に表現するよさや価値について実感させます。そして、直接指導の際に子供の姿から見取りを行い、評価していくことが重要になります。

次に、「とも学び」で思考を深めるように授業を組み立てられるかどうかは、「授業者の力量」にかかってきます。とも学びは複式授業において大きな「山場」と捉えてください。対話することだけが目的ではなく、「考えの真意を問う」「図と関連させて説明を促す」「子供自身の言葉で語らせる」「解決結果を問題場面と照らして見直す」など、子供が目的をもってとも学びを行っているかが大切です。だからこそ、とも学びにおける子供の姿は直接指導として「確実に評価する（見取る）」ことができるように準備しておきましょう。評価を充実させ、気付きを促すことで、考えをさらに深めるきっかけになると思います。

複式の強みは異学年での学び合いです。「教材研究という一番の仕事」を充実させ、子供たちとの出会いを大切にしていきたいです。また、子供の人生の一翼を担う責任と喜びを感じながら、複式授業で学ぶ子供たちの成長を後押ししてほしいと思います。

中部教科研究センター
指導アドバイザー
片岡 さえ 先生

【参加者の声】

- ・児童の実態を理解し授業を組み立てていくことを学び、既習事項を活用しながら直接、間接指導を行いたい。
- ・大事な部分で直接指導を行い、考えを共有したり、深めたりすることが大切と感じた。学習の足跡も大切にしたい。
- ・複式の授業形態を再確認し、大切な部分でわたれるようにずらしを意識したい。

